

いつのまにか 20 年

日本語教室ボランティア

と し こ
野島與志子さん



が市報に掲載されて
いるのを目にし、応募した
のがきっかけで
す。日本も外国
も好き、文化と

1992年に外国人との交流を通じ、多文化共生社会の実現を目指すボランティア団体として創設された「清瀬国際交流会」。日本語教室はその事業の一つとして運営され、現在約57名の外国人が日本語を学んでいます。日本語教室のボランティアとして19年、学習者への支援に向き合う中から、つながりをもつと持ちたいと民生委員も務めるようになった野島さんに、これまでの活動や想い、今後についてお話を伺いました。

● ボランティアを始めたきっかけ

若い頃金融機関に勤めていました。公務員の夫と結婚し、子どもが生まれて仕事を辞め、専業主婦となりました。夫の実家は農家でしたので、農業を手伝いながら家庭を切り盛りする生活となったのです。が、やがてもっと社会と関わる生活がしたいと思うようになりました。何か方法がないかと考えていたところ1997年に「日本語学習支援ボランティア養成講座」の募集記事が市報に掲載されているのを目にし、応募したのがきっかけです。日本も外国も好き、文化と

● ボランティアでの苦勞や喜び

学習者はアジアからの女性が多く、複雑な事情を抱えている人も少なくありません。そのようなこともあり、来日等の諸事情は学習者が自ら話せば聞きますが、こちらからは聞かないようにしています。目の前の学習者は、何が目的で勉強に来ているのか、何を目標にどのように学習すればいいのか、その表情から相手が納得しているかどうかをくみ取り、その人に合った教材と進め方を工夫しています。嬉しいのは努力の結果、学習者が日本語能力試験や、運転免許、介護士資格等を取得して就職に繋がったりすることです。でもそうなるまでの学習者の並々ならぬ努力に比べたら、私たちボランティアの応援など微々たるものです。年1回開催されるスピーチ発表会で学習者が自分で文章を作り、発表する姿を見るのは、とても嬉しいことです。

また、学習者が助けを求めている場合は、民生委員として、学習者が抱えている困難に対応してくれる男女共同参画センターや、市内外の外国人相談窓口、ケースにより市の生活福祉課や

健康推進課等へ繋げるほか、医療機関に付き添いをすることもあります。

● 生活上の日本語ボランティアの比重

ボランティアの活動は、私の生活の上でも大きな位置を占めています。日本語の学習は概ね1対1で行いますが、同じくらいのレベルの人が一緒に時は1対2〜3ということもあります。実際にボランティアをしている間だけでなく、それ以外の時間も、毎回それぞれの相手に合わせて教材を用意し、それを習熟する方法を考えています。

● 今後の願い

これからも学習者に寄り添い続けていきたいと思っています。せっかく日本に来たのに、困難にあつて帰国しようとする学習者もいます。ですが、この教室での努力に自信を持ち、やがて日本国籍を取るまでになる人もいます。学習者が日本に来てよかったと思えるような充実した生活を送れるようお手伝いができること、それが私の願いです。

（インタビューを終えて）

約20年と一言でいえば早いのですが、農業や家事をしながらボランティアを続けた野島さんの年月に、とても深みを感じました。ボランティアとしての尽力から民生委員へ。自然体の心遣いを感じるばかりです。

（インタビュー 桑山）